

## 今でも使われている運勢暦と大雑書のなかの占い その仕組みを知っていますか

坂 出 祥 伸

本学図書館には江戸・明治時代の占い書が100点あまり所蔵されています。これらの大部分は、西浦義夫氏、黒川修光氏の寄贈によるものです。その蔵書構成は相書（人相、家相など）が最も多く、ついで五行易、九星占、大雑書、暦などです。彦根市立博物館琴堂文庫（故井伊直忠氏の旧蔵書）が所蔵する占い書1651種、2786冊にははるかに及びませんが、内容的にはかなりすぐれた書籍が所蔵されていて、これを中心に今回展示されたのであります。

占いといえば、すぐに筮竹<sup>ぜいちく</sup>を用いた、いわゆる易占が思い浮かぶのですが、回覧しています資料をご覧いただければ分かりますように、占いには種々あります。今さっき申しました五行易、九星占、人相書、家相書、暦、大雑書などがあります。今日は比較のために中国の占い書であります通書と日用百科事典であります万宝全書、それに台湾・韓国の暦書（占いや日選びを記載）を持参してまいりました。

日本・旧中国（台湾や香港に残存する）・韓国での市販の暦には共通する記載事項があります。六曜、十二直など日の吉凶を示す記事や九星占のように方位や相性の良し悪しを判断する占術の記事を載せています。これらを順次説明しましょう。

### 一、六曜説

今の運勢暦の下段近くには、日ごとに、「先勝（せんかち、せんしょう）」「友引（ともびき）」「先負（せんまけ、せんぶ）」「仏滅（ぶつめつ）」「大安（たいあん、だいあん）」「赤口（しゃっこう、しゃっく）」の名称が見えています。これは、それぞれの日の吉凶禁忌を示しています。その内容は日本では、先勝の日は「急用や訴訟などに用いて吉の日、ただし午後は凶」、友引の日は「午前中と夕刻と夜は相引きで勝負なしの吉の日、ただし昼は凶。この日葬儀を行うと死人の道づれにされるおそれがある」、先負の日は「静かにしているのがよい。とくに公事や急用は避けたほうがよい。ただし、午後は

大吉」、仏滅の日は「移転、開店、新規事業の開始などはもちろんのこと、陰陽道においてはすべてのことに悪い凶の日」、大安の日は「婚姻、移転、建築、旅行、新規事業の開始などをはじめ、もろもろのことに用いて吉の日」、とされています。（東京・神宮館発行『平成十六年神宮寶暦』による）



講演中の坂出教授（平成15年11月29日）

この六曜説の基本的ルールは、先勝 友引 先負 仏滅 大安 赤口の順の繰りかえしであります。さらに、旧暦の正月・七月の朔日は先勝、二月・八月の朔日は友引、三月・九月の朔日は先負、四月・十月の朔日は仏滅、五月・十一月の朔日は大安、六月・十二月の朔日は赤口と定められています。また、旧二月十五日は仏滅（涅槃会、釈迦入滅）、旧四月八日は大安（降誕会、釈迦誕生）、旧十二月八日は先勝（成道会、釈迦大悟）とも定められています。

ところで、この六曜説は、おそらく中国の宋代ごろに始まったと思われます。というのは、『事林広記』という最も早い日用類書に六曜説が見えているのです。しかし、その名称や内容、吉凶の説明は中国と日本では異なっています。上段は『事林広記』での名称であり、下段は現代日本での名称です。は変更されていることを、＝は同じ名称であることを示しています。ただし、友引とか仏滅とかが日本

でできた呼称なのかどうか、現代中国で発行された陳永正編『中国方術大辞典』(中山大学出版社、1991)の六曜の項にも出ていますので、中国でも使われているのかも知れません。

宋代の『事林広記』の名称

大安 留連 速喜 赤口 小吉 空亡

大安 友引 先勝 赤口 先負 仏滅

現代日本の運勢暦

『事林広記』という書物について、若干説明いたしますと、これは南宋末に成立したかと思われるのですが、撰者は陳元靚とされていますが、その経歴などはほとんど分かりません。この書物の内容は、伝統的な類書という形式を踏襲しながらも高等な知識ではなくて市井の人々の生活の需要を満たそうとする百科全書であります。例えば、冠婚葬祭の儀礼的知識、農桑に必要な知識といったように、きわめて実用的な知識が盛り込まれていて、それ以後、元・明時代に盛行する「不求人」「万宝全書」と名づけられる日用類書の先駆をなすものであります。ただし現在伝存するのは、元・明時代の刊本ですが、その中の『新編群書類要事林広記』(和刻本)壬集巻7に「六壬課時」という項目が立てられていて、そこに「赤口、小吉、速喜、空亡、留連、大安」という六曜の名称が出ており、さらにそれを解説しているように、「大安の時は、木に属す、青龍が事を主る。大い安くして事が昌んである。財を求めるのは坤の方に在る、物を失っても去ること遠くはない、宅舎は安康を保つ、行人(旅行者)の身は未だ動かず、病鬼は殃いを為さない、將軍は旧願に還る。子細は推詳を為す」「留連の時は、水に属す、玄武が事を主る。留連すれば事は成り難い、謀を求めるには日が未だ明けないうちに、官事は只だ緩くするがよい、去れる者は未だ回程せず、失せ物は異の上に寛められ、急いで討めれば方に心に称い、更に須らく口舌を防ぐべし、人の口は且つ平平たり」。速喜、赤口、小吉は省略し、空亡については、「空亡の時は土に属し、勾陳が事を主る。空亡の事は長くない、陰人は乖き張ること少なく、財を求めても利息はない、行人には災殃があり、失せ物は土の裏(なか)に蔵れている。官事には損傷があり、病人は暗鬼に逢い、解願(願は願あるいは襪に作る)すれば安康を保つ」と。

このような記載は、その後の明清時代の日用類書では、例えば『新刻艾先生天禄閣採精便覽万宝全書』(明・崇禎初年、1628)巻30通書門、『訂補全書備考』(明・崇禎14年、1641)巻19通書門、『増補万宝全書』(清・乾隆12年、1747)巻19通書門などには、「李淳風課訣類」という大きな見出しが立てられ、そこに「六壬掌訣」という小項目が立てられて同じ記載が見えています。ただし若干文字の異同があるだけであります。さきほど六曜説は宋代に始まると申しましたが、李淳風(602~670)は唐代初めの天文学者として知られています。ですから彼が創始したとも考えられますが、しかし彼の名に仮託されたのであろうと考えた方が妥当でしょう。さて、その後の日用類書にも「六壬掌訣」として六曜説は継承されていると思いますが、今は香港で発行されている『万事勝意』(聚宝楼、1993)という通書に「起例掌訣」と題してほとんど同じ記載があることを指摘しておきましょう。つまり、香港や台湾のように旧中国の習俗を保存し継承している地域では六曜説が生きているのですが、大陸中国では滅んでいるようです。また、韓国ではどうしてか民暦に載せられていません。私の調べが足りないのかも知れませんが、

江戸時代の「大雑書」と呼ばれる、やはり日用百科事典には記載されてはいるものの、明治以前には六曜説はあまり重視されていなかったようです。これが非常に重視されてきたのは、戦後のことらしいです。林淳「暦の変遷と六曜」の調査表によれば、友引、大安、仏滅の使用率は都市農村を問わず極めて高く、また友引の日に葬式を避けたことがあるかという質問に対しては、7割近い人があると答えています。こういう実情は今日でも大きな変化はないでしょうし、ホテルや葬儀社が仏滅の日の結婚式、友引の日の葬儀を避けるよう勧めていると聞きますから、あるいは一層進んでいるかも知れません。

## 二、十二直説

運勢暦の六曜の下段には、ひらがなで、たつ(建)のぞく(除)みつ(満)たひら(平)さだん(定)とる(執)やぶる(破)あやぶ(危)なる(成)おさん(収)ひらく(開)とづ(閉)と記載されています。括弧内は、本来の漢字です。江戸時代の暦では「中段の吉凶」と称されて重視されていました。どういう占いかを説明します。

たつ この日は「建」の意を含み、最吉日にあたり、神仏の祭祀、婚姻、開店、移転、柱立

- て、棟上げ、旅行、新規事の開始など大吉です。ただし屋敷内の動土、蔵開きは凶です。
- のぞく この日は「除」の意により、百凶を除くとされています。医師にかかり始め、種まき、井戸掘りは吉。ただし婚姻、屋敷内の動土などには凶です。
- みつ この日は「満」の意の示すとおり、万象万物ことごとく満溢まんいつされる吉日とされています。建築、移転、開店をはじめ、婚姻その他の祝いごと、種まき、動土、すべて吉です。
- たひら この日は「平」の意の示すとおり、物事が平等平和に成立する日です。地固め、柱立て、種まき、旅行、婚姻その他の祝いごとは円満の結果ですが、池、溝、穴を掘るなどには凶です。
- さだん この日は「定」の意の示すとおり、物事すべて定まってとどまる日です。建築、移転、開店、開業、婚姻、種まき、新規事の開始などは吉ですが、訴訟、旅行などには凶です。
- とる この日は「執」の意の示すとおり、万物の活動に育成を執行し促す日です。神仏を祀り、婚姻その他の祝いごと、造作、種まきなどには吉で、金銭の出し入れ、財産整理には凶です。
- やぶる この日は「破」の意を含んでいて、物事を衝き破る日とされています。従って訴訟や談判ごとなどには吉ですが、神仏の祭祀、祝いごとなどはすべて凶です。
- あやぶ この日は「危」の意を蔵しており、何事も控えめに慎むべきで、とくに旅行、登山には凶で、酒造のみは吉です。
- なる この日は「成」の意を含み、新規事の開始はすべて成就達成の結果を得て吉ですが、訴訟、談判などには凶です。
- おさん この日は「納（おさめる）」のに良い日とされ、五穀の収納、商品の買入れなどには吉ですが、結婚、見合いなどは凶です。
- ひらく 神使天険を開通する意の日で、建築、移転、開店、婚姻などすべてに吉です。ただし葬式、その他の不浄事は凶です。
- とづ この日は諸事閉止する意を含み、金銭の収納、建墓、便所造りなどには吉ですが、棟

上げ、結婚、開店などには凶です。

その来歴は非常に古く、『史記』日者伝には「建除家」の語が見え、『淮南子』天文訓には「寅は建たり、卯は除たり、辰は満たり、巳は平たり、生を主る、午は定たり、未は執たり、陷を主る、申は破たり、衡を主る、酉は危たり、杓を主る、戌は成たり、少徳を主る、亥は収たり、大徳を主る、子は開たり、大歳を主る、丑は閉たり、太陰を主る」という記述が見えています。最近、戦国時代の秦国の墓から出土した竹簡にこれが記載されていたので、十二直説は前3世紀にまで遡るものであることが分かりました。

十二直説は、その後も伝承されているのですが、私の調べた限りでは、敦煌出土の『解夢書』（ペリオ3908）という夢解きの文書に登場していますが、この文書は唐代のもので、例を挙げてみましょう。

除の日に夢を見れば、憂いがおこり病がおきる。

満の日に夢を見れば、酒肉に出逢う。

執の日に夢を見れば、財を失うことに関係する。

収の日に夢を見れば、大凶悪の事がおきる。

前記の宋代の『事林広記』には登場せず、明代になって、鄭璠こうはん（弘治年間、1500前後）の著わした農書『便民図纂』巻10涓吉類けんきつに数多く見えているのが最も早いようです。例えば、入学の項では、吉日として、「己巳、戊寅、・・・及び三合、六合、成、定、開の日」を列挙しています。そして、凶の日については、小字割注で「建、破、・・・を忌む」と記載されています。このような例をいくつか挙げてみましょう。嫁娶には成の日、立契には執・成の日、納財には収・閉の日、出行には満・成・開の日がそれぞれ吉だとされています。

明の万暦年間に刊行された日用類書では、『新鍬全補天下四民利用便觀五車拔錦』（万暦25年、1597）巻19尅扱門で正月から十二月までの毎日について十二直説を用いて吉凶を記していますし、また『鼎録崇文閣彙纂士民万用正宗不求人全編』（万暦37年、1609）巻19尅扱門には「十二日值行」という見出しを立てて、建日は「舎宇に泥を塗る、産室を備える、出行、祭祀、入学、冠帯、作事、求人、上官、謁貴、上表はみな吉であり、忌むべきは、起工、動土、開倉、祭竈、新船下水、行船装載、競渡だ」と記載されています。以下、除日、危日、成日、収日、開日、閉日などについて吉と忌とが記述されています。

清代の乾隆6年（1741）に刊行された占ト集成で

あります『欽定協紀辨方書』では巻4「建除十二神」に解説されています。これは十二直説についての資料的な概説となっていて、資料を探すのには便利です。

今日では台湾の民暦や通書、香港の通書、韓国の暦にはすべて十二直が記載されていますが、大陸の暦でも、近年になって復活登場してきています。例えば、2000年12月、漳州で購入しました36頁の薄い『通書』(2001年版) 実は暦ですが、これには日ごとに十二直のどれに当たるかが記載されています。また、1997年12月に福州で購入しました『正宗通勝日曆』という日めくり暦にも、例えば右側に「戊申土奎成日」と書かれ、左側には「宜開市安葬出門嫁娶」「忌動土」という記載がありますから、こういう択日を必要とする人々が今日でも大勢いると想像されます。

日本では、古くは正倉院にある「具注暦」に十二直の記載があって、おそらくその後も伝承されていたのでしょうが、江戸時代では、「中の段」として親しまれていました。展示されています「伊勢暦」では、各日の下に「かのえいぬ」「かのとのい」「みつのえね」のような干支の指示があり、その下に「なる」「おさむ」「ひらく」などと、ひらがなでの十二直の記載があります。それが今日の運勢暦にも生き残っているのですが、しかし実のところ、どれほどの需要があるのでしょうか。

それでは、十二直説はどのような仕組みになっているのか、簡単に説明しましょう。

十二支を方位に配当することが、中国のかなり古い時代から始まっていました。真北を子とし、以後順に十二支を東回りに配分します。これによって真東は卯、真南は午、真西は酉、西北は戌の方向と亥の方向の間にあるので戌亥(いぬい、乾)、東南の方向は辰巳(巽)、東北の方向は丑寅(うしとら、艮)、南西の方向は申未(ひつじさる、坤)と呼ばれます。この十二支の方位への配当と北斗七星の動きとを組み合わせると日の吉凶を示すのが十二直です。つまり、十二節季の毎月の節の暮六つ時に北斗七星の斗柄(破軍星)の指す方向を月建というのですが、それも十二支に配当されます。正月の節には破軍星の剣先が寅の方向に向い(寅に建す)、二月の節には卯の方向に向い、以下順に十二月には丑に建すのですが、翌年正月の節にはふたたび寅、二月はふたたび卯となってしまう、日の吉凶を占う必要がなくなります。そこで、正月最後の最初の寅の日の十二

直に、最初の建を当て、順次に次の卯の日には除、辰の日には満を配当するのです。二月卯月の節には、その節の最初の卯の日に建を配し、翌日辰の日には除を配し、順を追っていき、三月の節の後の最初の辰の日は十二直がふたたび建となります。このようにしていくと、十二直は各節ごとに、どこかで一つ遅らさなければならぬ。そこで、節の日とその前日と同じ十二直を配当するのです。(十二直割当表参照) 十二直にはそれぞれ吉凶が示されていることは、前に述べた通りです。

十二直割当表

支	月	正	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二
子		開	収	成	危	破	執	定	平	満	除	建	閉
丑		閉	開	収	成	危	破	執	定	平	満	除	建
寅		建	閉	開	収	成	危	破	執	定	平	満	除
卯		除	建	閉	開	収	成	危	破	執	定	平	満
辰		満	除	建	閉	開	収	成	危	破	執	定	平
巳		平	満	除	建	閉	開	収	成	危	破	執	定
午		定	平	満	除	建	閉	開	収	成	危	破	執
未		執	定	平	満	除	建	閉	開	収	成	危	破
申		破	執	定	平	満	除	建	閉	開	収	成	危
酉		危	破	執	定	平	満	除	建	閉	開	収	成
戌		成	危	破	執	定	平	満	除	建	閉	開	収
亥		収	成	危	破	執	定	平	満	除	建	閉	開

### 三、九星占(九宮、九曜星)

運勢暦の上段あるいは後半部に、一白水星、二黒土星、三碧木星、四緑木星、五黄土星、六白金星、七赤金星、八白土星、九紫火星という記載があります。これが「九星占」と称される占いです。

太古の時代、夏王朝という伝説的な時代がありましたが、その禹王の時に洛水から現れたという亀の甲羅に文様が描かれていて、それを「洛書」といいますが、その文様は1から9までの白と黒の点で、それは5を中心に配列され、縦、横、斜めから数えて、いずれも数字の和が15になるという魔方陣でありました。この1から9までの数字を白、黒、碧、緑、黄、赤、紫の七色に当て、さらにこれに木、火、土、金、水の五行を配当し、この数字が順次、場所を変えた場合を考えて、それに神秘的な解釈を加えたものが九星であります。(図参照)

この九星占は中国の唐代ごろに始まっていて、日本では室町時代以降に流行したといわれています。

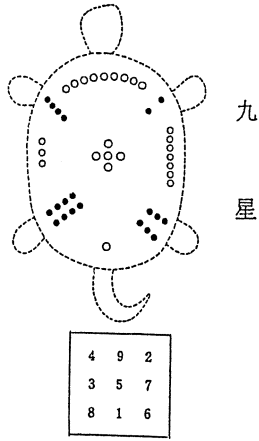
人間の運勢や吉凶の判断に、水星など九つの星の巡行が用いられているのですが、実際の天体上の星とは関係がありません。五行説でいう木、火、土、金、水と、白、黒、碧、緑、黄、赤、紫の七色を組み合わせたものです。つまり、

一白水 二黒土 三碧木 四緑木 五黄土 六白金 七赤金 八白土 九紫火  
という組み合わせにします。

九星は八角形の図に当てはめられます。中央(中宮)に五黄土星を置き、他の八星を八方向に配当するのです。これを本位といいます(図)。この配当は年にするのが一般的ですが、運勢暦には月と日にも配当されたのが出ています。ここでは年に配当された場合について説明いたします。

この図形は毎年変化し、九つの変形を繰り返し九年目に一巡するのです(図 ~ )。

中央(中宮)には毎年違う星が入れ代わって配置されます。中宮に入る星を、その年の「本命星」といいます。生まれた年の本命星が自分の本命星になるのです。そして毎年本命星と自分の本命星の相互関係で運勢が決定される、というのが、この九星占の基本であります。



「暗剣殺」

暗闇から剣が急にとびだしてくるような方位のことで、その方位を犯せば、偶発的に、また多発的に急速に傷害がおこり、悪い結果がおこるとされています。

五黄土星と反対側の方位。また、本命星(生まれた年の九星)が五黄土星の反対側、180度の方向にある時期をいいます。例えば、本命星が「三碧」の人の暗剣殺は、四緑中宮の時期です。

「五黄殺」

五黄土星がある方位をいい、その方位を犯せば、慢性的に、また自発的に緩やかな傷害がおこり、悪い結果に終るとされています。

五黄土星の位置している方位であり、また、時期としては五黄中宮の年にあたります。

相性のよい悪いとはどういう場合をいうのかについて説明しますと、

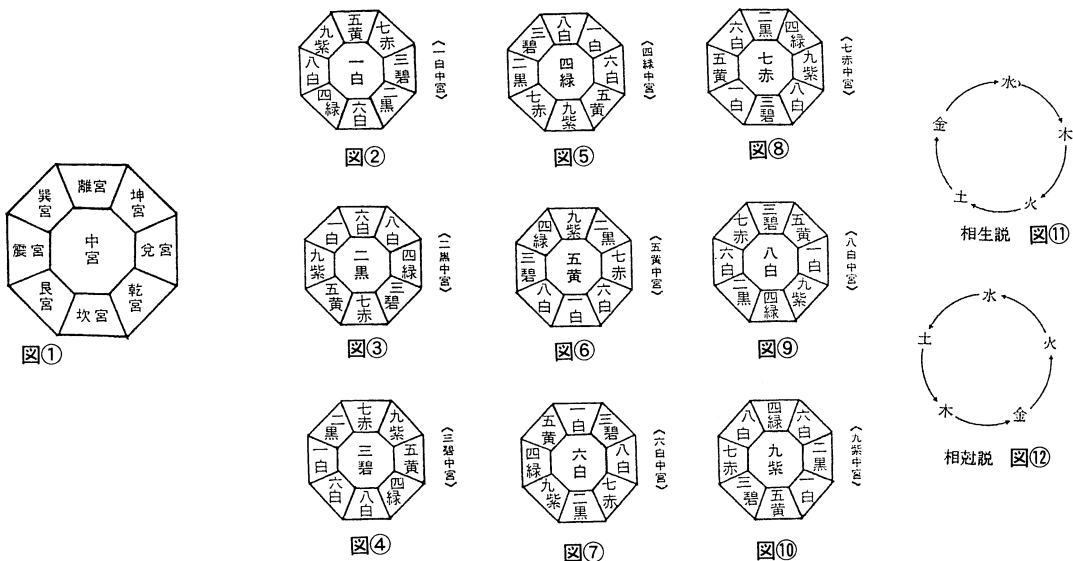
- 五行相生の関係 相性がいい(図)
- 五行相克(尅)の関係 相性が悪い(図)
- 五行比和の関係 相性がいいとはいえない。

例 本命星Xと本命星Yとが相生関係にあるかどうかで相性が決まる。

- 二黒土星の人と九紫火星の人との関係  
火と土は相生関係 相性がよい
- 二黒土星の人と四緑木星の人との関係  
土と木は相克関係 相性が悪い

四、大雑書について

江戸時代の庶民に重宝されていた生活日用百科として「大雑書」(おおざっしょ、あるいは、だいざ



っしょ)と呼ばれる書物があります。都の錦という人が著わしたとされます浮世草子『元禄大平記』に、大坂の本屋が当時の出版事情を評して、「すでに大坂において、『家内重宝記』が出来始めしより此かた、その類、棟に充ち牛に汗するほどあり。しかれども此ごろは重宝記も末になり万宝にうつる。」とありまして、元禄期の出版物の流行盛衰ぶりを述べていますが、ここに登場する重宝記とは、『昼夜調法記』『諸人重宝記』『家内重宝記』などであり、また、これらをいっそう詳しくしたのが、『万宝全書』『万宝調法記』であり、今田洋三氏の指摘によれば、このような「庶民のための簡易百科事典」は元禄年間に20種あまりも出版されているそうであります。そうした書物と同類の日用百科が「大雑書」と称されるものです。これは占いの専門書ではありませんが、しかし占い記事が中心になっています。寛永9年ごろから出版されているのですが、やはり元禄年間以後に急速に増加しています。そして、いつの頃からか上下二段組みになって、所載項目も漸次増加しているのですが、こうしたものが江戸時代を通じて約100種は出ているということです。今私の手元にあります、天保2年(1831)増補の『天保大雑書』(東都書林刊)を見ると、「六よう星くり屋う之事」と題して「六曜星」の日選びが記載され、「こよみ中だん」と題されて十二直説が解説されています。また明治16年(1883)に東京書林から出た『大増補永代萬曆大雑書大全』には「六曜星日取の考」とともに「本命的殺早繰秘伝」と題して、九宮占の肝心な部分が「本命的殺の真に怕るべき事は世の人のよく知る処なり、たとへ鬼神鬼門の方は用ゆるとも此の的殺の方は決して犯す可からず、若し是を犯せば其の祟り甚だしく殃害觀面てきめんに来らん、年々の殺の方位左の図中を見て知るべし」と解説されて方位図が掲げられています。

この『大増補永代萬曆大雑書大全』の総目次の中からいくつかの内容を摘録してみましよう。

上段:「日の巡る線の図」に始まる天文現象、気象現象の解説、あるいは日常生活上の諸注意がすべて70項目記載されていますが、占い・日選びに関係がありませんので省略します。

下段:六十の図、渾天儀の図、曆道惑問の弁、三鏡宝珠の説、如意宝珠とも云同図、年徳神の図説、八將軍の図説、大將軍遊行日、金神の図説、金神遊行日、同四季遊行日、大

歳とせの異名、歳次とせつぎの異名、三月塞とせの方位、鬼門方位口訣、十干の解、十二支の凶解、廿八宿吉凶凶解、同方位并に凶、七曜星吉凶の解、天一天上の説、并に遊神の事、天一神方位の図、八專とせの説、同凶、彼岸の説、入梅の説、土用の説、二百十日の説、冬至一陽来復の説、節分の説、井掘井浚心得の事、井を堀ほるに水脈を知る事、井の水善悪を知る法、本命的殺早繰秘伝、同図説、知死期くりやうの事、病人馬祿の占ひ、六十甲子五行の解、男女相性凶説、并に四厄十悪の事、有卦無卦十二運の事、十二支月とり時とり、弘法大師四目録の占、四目録うらなひやう、皇帝四季の占ひ、破軍星のくりやうの事、六曜星日どりの考、夫妻縁組のうらなひ、他国へ売買に往方角吉凶、・・・(出産前後の食養生、懐胎時の注意)・・・十二月八卦配当の例、不成就日の事、不成就時の事、空亡日、大願成就日、五性によりて売買、取扱品の吉凶、商初吉日、以上76項目

このように『大雑書』の下段には暦の中段の日選びを始めとして様々な占い、日選びが解説されていて、庶民の日常気に掛ける事柄が記載してあるので、大いに歓迎されて流布していたと考えていいと思います。

その利用状況について、小池淳一氏によれば、西鶴の『好色一代男』(天和2年、1682)巻七に「恋はざつしよの通り、はじめよし、後わるし、金性の男ありける。・・・」と見えているそうです。他にも探せば小説や芝居の中に見つかるのではないのでしょうか。近世の国文学や日本史を専門とされるお方の御教示をお願いします。

## むすび

ところで、以上に紹介してきました暦の中の占いや、今回展示されています種々の占い書は江戸時代のいつごろから、どのように出版され、またどのように流行したのでしょうか。占いそのものは、継体天皇のころに百済から伝えられたのが始まりでしょうが、その後も宮廷や貴族の間で継承されてはいたのですが、ここでは江戸時代以降の出版文化のなかで考えてみたいのです。というのは、一般に書物は出版されることによって知識が広く伝播するようになるのですが、豊臣秀吉が朝鮮から活字工を連れて

帰り、それによって日本に活字印刷が始まることはよく知られています。しかし、その活字は銅活字が木活字であって大量印刷には不向きでした。ところが徳川時代も中ごろになって庶民の力が増大し、同時に幕府が文化の普及に努めたことと相俟って、これまで僧侶や上級武士などに読書人が限られていたのが、京都、大坂、江戸など大都市や、地方の都市においてさえ、庶民の間で知識欲が高まってくるのです。このような需要に応えるべく新しい出版技術として製版、つまり木版印刷が発達し大量な出版の需要に呼応したのです。読者層の大部分が庶民であることは、当然ながら生活上の実用性のある書物が求められるでしょうし、あるいは商品価値の高い書物が求められるでしょう。先に挙げた『元禄大平記』にも、「当世はたゞ堅い書物を取置て、あきなひの勝手には、好色本が重宝記の類がましぢや」とあるのですが、庶民の好みを反映しているといえるでしょう。

このような事情にあつて、元禄以後、さまざまな占いが繁栄したのですが、曲亭馬琴（1767～1848）は晩年に口述筆記させた家記『吾仏乃記』という著作のなかの家説第四余七「方位撰択論」という文章の中で、

近曾唐山（中国）に、方位撰択の学行れて、舶来の通書多かり。こゝをもて坊間の術士<sup>みだ</sup>に方位撰択の説を唱へて愚俗を恐嚇す。解（馬琴の名）少壯の時、方位の説を取らず、時日を撰むこともなかりしに、文化に至りて、彼術士等の言甚だしく世に行はれていと噪しかりければ、吾も亦、其書を読見ずして、其言の是非を知るに由なしと思ひしかば、年五十（文化12年）にしてはじめて通書を求めて繙閲しけるに、『五要奇書』を始にて、『協紀弁方』『三才発秘』の類、況又、『方位便覧』『方則指要』の如き通俗和解の書も多かるを、彼此となく購求むる程に、憶はずして十余金を費したり。

と占い書の流行繁栄ぶりに馬琴自身がのめり込んでいったことを告白しているのです。文化年間（1804～1817）になって占い書が盛んに世に出たといっているのですが、そのことを本稿冒頭に挙げました琴堂文庫所蔵の占い書に照らして検証してみますと、確かに文化年間になって方位占・家相・五行占など

の書物がにわかに増加して文政・天保年間に至っていることが分かるのです。このことはたいへん興味深い事象であります。清代中国の最新流行書籍の反映というだけでなく、江戸時代庶民の願望の反映でもあろうかと思うのです。

ご清聴ありがとうございました。

#### 参考文献：

- 鈴木敬信 『暦と迷信』 恒星社厚生閣、1969  
渡邊敏夫 『暦のすべて その歴史と文化』 雄山閣出版、1980  
川口謙二・池田孝 『こよみ事典』 東京美術、1982  
林淳 「暦の変遷と六曜」(島蘭進・石井研士編『消費される宗教』春秋社、1996)  
今田洋三 『江戸の本屋さん 近世文化史の側面』 (NHKブックス) 日本放送出版協会、1977  
浜田啓介 「出版ジャーナリズムの誕生」(中村幸彦等編『日本文学の歴史8・文化繚乱』角川書店、1967)  
藤井乙男編 『評釈江戸文学叢書』第2巻『浮世草子名作集』講談社、1970  
橋本萬平・小池淳一 『寛永九年版大ざつしよ』 岩田書院、1996  
横山俊夫 「大雑書考」(京大人文科学研究所『人文学報』第86号、2002)  
禿氏祐祥 「大雑書の類版」(『書誌学』第17巻第3号、1941年10月)のち、同氏『東洋印刷史研究』(青裳堂書店、1981)に収録。  
この論文には橋本萬平氏が寛永9年を初刊とされる以前の寛永初年刊、寛永8年刊について「吾人の一覽した分」と記されているのに注意したい。  
木村三四吾編校 『吾仏乃記』 八木書店、1987。引用文の句読は本書による。  
坂出祥伸 「解説 明代日用類書について」(『中国日用類書集成』第1巻所収、汲古書院、1999)  
(さかで よしのぶ 元文学部教授・現名誉教授)

---

この講演会は、平成15年度秋季特別展「江戸・明治初期の占書展 - 庶民の生活の中の占い -」にちなみ記念講演として、平成15年11月29日(土)図書館ホールにおいて開催したものである。

---